

エッセイコンテスト徹底研究

～JICA エッセイコンテストで世界の問題を考えるきっかけを与えよう～

都立新宿山吹高等学校 (全国国際教育研究協議会常務理事) 齊藤宏

今年はブラジル移住 100 年、JICAエッセイコンテストは移住促進から はじまり 45 年間続いてきた歴史あるコンテストです

驚くことにもとは移住促進としての「海外移住懸賞作文」から始まったのです。高校生エッセイコンテストに対する国際研の協力の歴史は古く、「エッセイコンテスト」と改称されたのは 1990 (平成 2) 年で、つい最近ですが、最初は「海外移住懸賞作文」として 1962 (昭和 37) 年中学の部「私の南米観」高校の部「我が国の海外移住はどうあるべきか」という、今ではなじみの薄くなった海外移住をテーマに行われたのです。その頃、国際研は「全国高等学校海外教育研究協議会」(以後 全海協)として、戦後の移住の再開と共に農業青年の移住が盛んになり、その対象となる青少年に対し、海外移住の正しい理解と発展を促すための教育の必要性から、農業高校生の卒業後の移住に方向性を向けたものでした。当時、移住事業団だった JICA と全海協は強い協力関係を持っていました。その協力関係で生まれた冊子「海外への道」の巻頭には当時の全海協副会長中島圭之助氏の「居心地の良い確かな現在よりも不確かな可能性の未来に挑む」という、今でも勇気を奮い起こさせる一文が書かれています。この冊子は今も JICA 横浜・海外移住資料館の資料室に保管されています。

しかし、その後日本の経済は飛躍的な発展を遂げ、国際社会における日本の地位が向上し、国際人としての日本人の育成が論議されるようになり、全国の研究集会においても、しばしば、国際理解、国際協力に関する学校教育のあり方とその方法が検討され、より実践的な国際活動を基盤とした「国際社会で活躍できる人材育成のための教育活動」に流れが拡大していったのです。

この流れは、JICA が「海外移住事業団」から「海外技術協力事業団」を経て 1974 (昭和 49) 年「国際協力事業団」に変わって行く流れと呼応したものでした。その流れを受け、1983 (昭和 58) 年テーマは移住から「国際協力ー 21 世紀の友づくり」に大きく変化を遂げました。この年以降、1985 年「地球社会に生きる」1986 年「途上国とのふれあい」などの国際協力に関連したテーマが続き、現在の「世界のみんが幸せになるために私が考えること、できること」にまで至ったのでした。

しかし、今年はブラジル移住 100 年で、海外で生活する移住者や日系人は約 250 万人にもなり、新たな展開として、日系人とその家族をあわせ約 30 万人の人たちが日本で就労や勉強のために戻ってきて、100 年の歴史を超えての交流が行われているのです。日本の国策で行われた海外移住の歴史を振り返り、日本と日系人社会、さらには移住先の国との関係を考えるきっかけにもしたいものです。以下にエッセイコンテストの年度別テーマの記録を紹介しますが、テーマに当時の時代背景が見えてきます。

年度	エッセイコンテスト（懸賞作文）年度別テーマ（高校生）
1962	【海外移住懸賞作文】わが国の海外移住はどうあるべきか
1963	【海外移住懸賞作文】海外に目を向けよう
1964	【海外移住懸賞作文】民族の発展と海外移住
1965	【海外移住懸賞作文】国際協力と海外移住
1966	【海外移住懸賞作文】フロンティアにいどう
1967	【海外移住懸賞作文】世界の中の日本人
1968	【海外移住懸賞作文】移住 100 年を迎えて（日本の移住は 1868 年に始まった）
1969	【海外移住懸賞作文】私の将来と海外移住
1970	【海外移住懸賞作文】若人の海外発展への道
1971	【海外移住懸賞作文】国際社会に生きる若人
1972	【海外発展懸賞作文】国際化時代と日本人の役割
1973	【海外発展懸賞作文】日本の将来と海外移住
1974	【海外発展懸賞作文】海外に求める私の生きがい、世界資源と日本の将来
1975	【海外発展懸賞作文】これからの日本人と国際感覚
1976	【海外発展懸賞作文】海外に生きる若者
1977	【海外発展懸賞作文】私が考える南米
1978	【海外発展懸賞作文】ブラジル移住 70 年に思う
1979	【海外発展懸賞作文】国際化時代とこれからの海外移住
1980	【海外発展懸賞作文】これからの海外移住に思う
1981	【国際協力懸賞作文】日本人の海外発展と国際協力、世界の中の日本
1982	【国際協力懸賞作文】なぜ国際協力もし私が途上国に生まれていたら、海外移住に可能性を求めて
1983	【国際協力懸賞作文】国際協力－21 世紀の友づくり 自由題 ①技術協力②青年海外協力隊③移住
1984	【高校生懸賞作文】私の中の途上国
1985	【高校生懸賞作文】地球社会に生きる
1986	【高校生懸賞作文】途上国とのふれあい
1987	【高校生懸賞作文】開発途上国とのふれあい
1988	【高校生懸賞作文】21 世紀を生きる一途上国とのふれあいの中で
1989	【高校生懸賞作文】21 世紀を生きる一途上国とのふれあいの中で
1990	【高校生エッセイコンテスト】えがお・で・あい
1991	【高校生エッセイコンテスト】（自由）
1992	【高校生エッセイコンテスト】心の地球儀回ってますか？
1993	【高校生エッセイコンテスト】自由（開発途上国について）
1994	【高校生エッセイコンテスト】自由（開発途上国について） 地球環境を守るため日本は何をすべきだと思いますか
1995	【中学生・高校生エッセイコンテスト】自由（開発途上国について）
1996	【中学生・高校生エッセイコンテスト】自由（開発途上国や国際協力について）

1997	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
1998	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
1999	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2000	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2001	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2002	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2003	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2004	【中学生・高校生エッセイコンテスト】途上国や国際協力について考えていること
2005	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 開発途上国や国際協力、国際理解について考えていること
2006	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 世界みんなが幸せになるために ～私が考えること、できること～
2007	【中学生・高校生エッセイコンテスト】 世界みんなが幸せになるために ～私が考えること、できること～

開発教育の促進や検証の手段としての利用

国際研としては、この事業に対して後援をし、毎年全国の大会でとりあげ、各地区で予選審査員に協力し、最終審査員には会長が参加し、各支部で総力をあげて取り組んでいる行事です。

その理由は、国際研の加盟学校の教師たちの国際理解教育及び開発教育の実践が本当に高校生達に伝わっているのかどうかを検証できる行事と考えられるからなのです。

教師が国際理解教育、開発教育にたずさわり、地域で様々な取り組みを行った、その反応、フィードバックがこのエッセイに生きてくるのです。いま高校生達が、何を感じ、何をし、どのように生きようと考えているのか、その一端を読み取ることができるからです。それは、一つには時代とともに変化していく高校生の感覚で、もう一つは、その内容の深さこそが、そのまま私達の教育への評価でもあると考えられるからなのです。

エッセイをだすことは目的でなく始まり

教師の立場はエッセイ勸奨を通じて生徒達の人生の進路へのファシリテーターの役目と考えましょう。つまり、エッセイが作品としてのエッセイに終わる事がないように関わることです。高校生が自分の体験に基づいたエッセイを書くことで、自分自身のアイデンティティに気づき、それが自分や人を動かす力になるような方向性に導けたら素晴らしい事でしょう。

年々応募者が拡大傾向にあるのは、国際協力という分野が社会に認知されてきたことと、学校現場において、私達研究会の活動が広がってきた証拠でもあると考えています。学校全体で課題として応募というような例もあります。その中に良いものも含まれているのでそれもひとつの方法といえますが、忘れてはならないのは出すことを目的化してはいけないことです。やはり自発的な応募が広がる流れをつくっていく事が重要です。例えば、授業の中で日本の国際協力にふれた

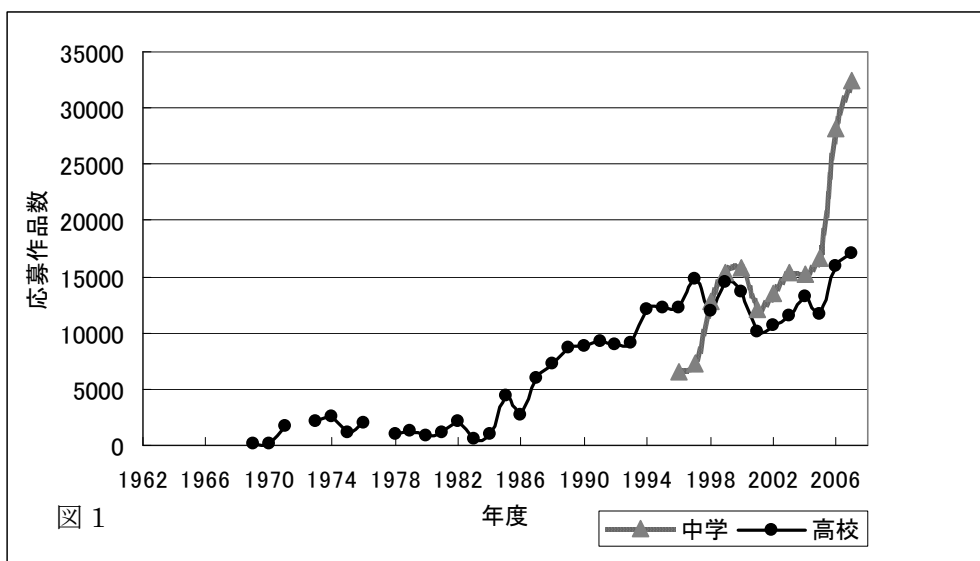
り、海外で経験をつんだ講師を呼んで話してもらったり、留学生との交流会を企画したり、生徒達を書きたくなる体験をさせることです。エッセイを書き、コンテストに出すことが、これからの人生の自分の進路を探す始まりになるようにかかわることです。なぜなら自分の考えや感じを文字に表すことは、その瞬間での自分の思考の記録を写真のように残すことと同じで、その文章を後から読むとき客観的に自分の成長の過程を知り、その自分を知った上で次のステップへの成長につながるからです。

2007 エッセイへの応募の傾向を分析する

今年のテーマは昨年に引き続き「世界のみんなが幸せになるために私が考えること、できること」でした。

2007年の応募傾向を分析してみると、(図1参照)昨年度の伸びほどではないがそれでも中学は32389作品で初めての3万作品の大台にのり、高校17020作品で中学は昨年より4266作品増加で+15%で、高校1047作品増加で+6.5%

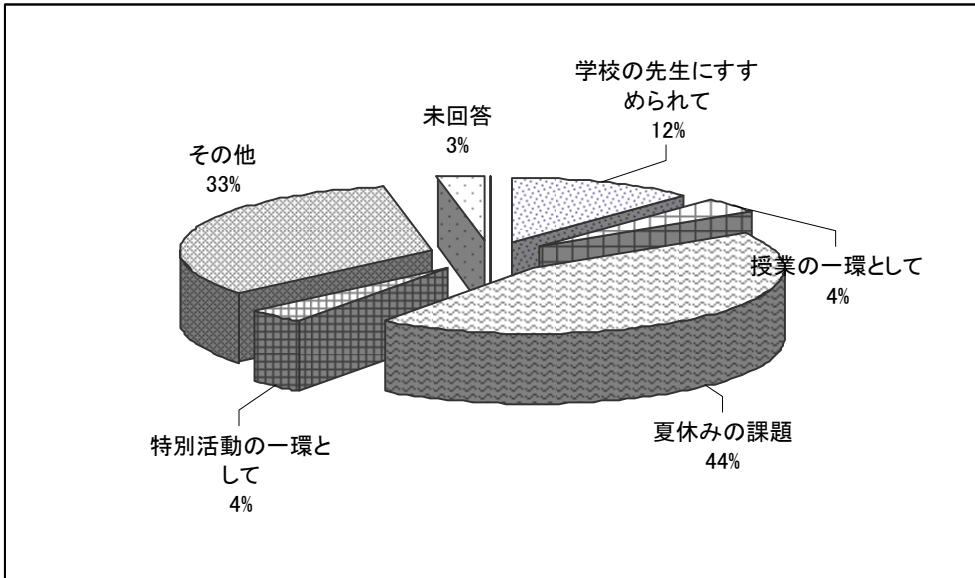
中学生133作品、高校生96作品の入賞となりました。これは昨年の増加率、中学68%、高校34%に比べると劣りますが応募者増の傾向は中学で3年連続、高校で2年連続ということでした。高校の応募数は1994年からほぼ13000作品を前後、中学は1999年から15000作品を前後する高原状態が続いていたものがあらたな増加傾向に入ったといえるでしょう。



この理由ですがもちろん、国際協力や国際貢献に関してマスコミでも日々取り上げることが多くなってきたことが関心を集めていることは間違いないですが、この種のコンテストは個人応募というよりも学校単位での応募が基本のエッセイコンテストとしては、先生方の関心が応募数にそのまま跳ね返るとかんがえる

のが無理がないでしょう。

つまり先生方の国際協力への関心が高まっていることが生徒の関心を広げていることになるのです。生徒の応募動機のアンケートを見てみると、以下のように、夏休みの課題が最も多く44%で、先生に進められて12%、授業の一環として4%、



特別活動の一環として4%を加えると、64%となり、いかに先生方の努力が影響しているか読み取れます。

また、副賞として、私的なツアー旅行では行くことが極めて難しい開発途上国の ODA 現場への研修旅行にいけるといのは他の政府系のコンテストの賞品とくらべても応募への高いモチベーションを与えることになっています。優秀賞に選ばれたかたに、研修旅行に行ってもらおうということは、とても効果的で、現地で更なるリアリティに接することになり、この後の成長に大きな影響を与えます。以前も、大学で国際協力分野を選び、国際協力の道での活躍を目指してしている方も育っています。

国際研も毎年の全国大会においてエッセイコンテスト勸奨をひとつのテーマとして取り上げ、JICA と協力して昨年度から機関紙「インフォメーション」を募集ポスターと一緒に全高校に配布しました、インフォメーションではエッセイコンテストについて開発教育のフィードバックとして最重要課題として取り上げて広報しておりそれに呼応した教師の勸奨も効果があったと考えています。

入賞者の中から中学・高校各々最優秀賞3名、優秀賞4名、審査員特別賞4名、地区・国内機関長賞11名計22名が決まりました。入賞者には副賞としてアジアなどの海外の日本の ODA の現場に実際に行って国際協力の最前線を体験することができるのです。高校だけで考えると、17020 作品の中から海外に行ける、審査員特別賞までもらえたのはたった11名、0.065%でほんとに狭き門なのです。

上位入賞作品のなかで最優秀賞や優秀賞はどんな作品が選ばれているのか紹介しましょう

岩手県 盛岡第一高校 1年の鈴木啓生さんの作品「大切なのは、知ること、伝えること」では、教育員会の海外派遣研修でフィリピンに行ったときに、物売りの子供たちに囲まれたとき感じた、「格差」は弱く幼いものを狙って押し寄せてくる現実を目の当たりにして、その現実を理解し周囲に伝えともに考えていくことからはじめると同時に将来困っている人を助ける医師になる考えをまとめています。

福岡県北筑高校 1年の杉本万理さんの「マウアが教えてくれたこと」は小学生のとき、お父さんの仕事の都合でタンザニアで生活したときのことを書いています。自家用車で学校に通う途中にみた、手や足がない奇形の体で熱いアスファルトの上を這い回りながら食べもの恵んでくれと訴えてくる暗く悲しい目を見たときに、豊かな日本の現実との格差を知った。そんなとき学校のボランティア活動で孤児院で生活する「マウア」に出会った。毎週通って勉強を教えるうち、あるとき彼女にかけた「かわいそうだね」という言葉に対して、かえってきた言葉は、「私は屋根のある生活ができるだけ幸せ、本当にかわいそうなのは路上でいまも生活している子供たち、私はそんな子供たちを減らすために勉強するの。」という答えに、自分の未熟さを痛感した。その体験から、マウアが教えてくれた不幸な誰かのためにできることを考え、自分は途上国の現実を背景に、途上国の人々に勇気や希望を与えることができる通訳になりたいと書いています。

埼玉県（自宅） 都立城南養護学校 2年 岩淵美紀さんの「お礼というボランティア」では、難病で病院にいる自分の立場は、入院費と治療にかかる費用のほとんどを国で賄ってもらい、その額は一日約4万円、そんな彼女が国際協力のために自分の持っているありったけのお金を金銭的援助をしても、すぐにそれを上回るお金が自分の体に使われてしまう無力感にさいなまれていた。あるとき、治療のひとつとして輸血が行われた。彼女は今まで多くの善意を受けているが、誰かの体で作られた血液が自分の体に入ってくること、体のなかから力がわいてくる感覚をうけた。そこで、彼女も元気になったら献血しようと考えたがそれは無理な話だった。そこに、姉からメールが届いた。「美紀が輸血でお世話になったお礼に献血してきたよ！」これで彼女は明るい気持ちになれた。助けてもらったお礼に退院できたらボランティアすることをおもいついたと結んでいます。

長崎県 純心女子高校 3年 中村茉莉菜さんの作品「平和への希望」ではイスラエル、パレスチナ、日本、平和を作る子ども交流プロジェクトに参加しイスラエルの女の子と一緒にホームステイをしていたとき、家族に電話してもつながらないと泣いている彼女の動揺が理解できなかった。戦火の耐えないイスラエルではいつ何が起こっても不思議ではない、戦争の中にある人々の苦しみを目の当たりにして衝撃を受けた。ディスカッションではケンカのような激しい議論も、平和に飢え、渇いているからこそ、どんなときにも平和への強い希望と持ち続けていることを知った。最後は敵国どうしの間にも友情が芽生えた。考えてみれば嘗ての日本も戦争によりなにもかも失われた。失われなかったものは、平和へ

の希望でありそれが日本の復興に導いたのだとわかった。この経験を通じて彼女は、日本の私たちに必要なのは過去を見つめ、経験者の声に耳を傾け「知り、伝える」ことだと結んでいます。

北海道 立命館慶祥高校 3年 越山穂波さんの「世界平和構築のためのアプローチ」では祖父の旧ソ連での抑留体験からの言葉「戦争は二度と起こしてはならない」を聞き「なぜ世界は争いをするのか？」という疑問を持った。この疑問を解決するために、広島原爆ドーム、靖国神社、東西ドイツの壁と捕虜収容所、アメリカではグラウンドゼロや国連本部、エラノ・ゲイの展示などを訪れた。もし、今戦争が起こったなら私も同じように敵をころすだろうかと自問自答しながら、平和な国際社会を築くために自分なりの一歩を踏み出す方法として、自分が水泳競技のアスリートであることから、軍事力による解決策でない一定のルールに基づき実施されるスポーツこそが、人々のそれぞれの立場を尊重する場として紛争という壁を乗り越えられる最適な手段として考えるにいたった。将来は国際スポーツ機関のスタッフとして共存共栄できる豊かな平和社会に貢献したいと述べています。

奈良県 同志社国際高校 菊川満月さんの「学問ノススメ」では、家族で上海に住んでいたときの字の読めないハウスキーピングのおばさんの子どもにコンピューターを貸したことから、その子どもの将来について家族で考えた。とても礼儀正しく、成績も良いその子は、母親から家族の生活のため口減らしのために住み込みで働かせられるという話をきいた。彼女の父母が母親を説得し、結局夜間高校に通いながら仕事をするができることになったのだが、まさに貧乏は輪廻するということを思い知った。日本では読み書きできるのが当たり前だが、それは世界の常識ではない識字は貧困から抜け出す第一歩だと感じた。将来世界の識字教育プロジェクトに参加したいと考えています。

東京都お茶の水女子大学附属高校 1年 川田さくらさんの「私とマラウイを架けた橋」では、現地で働く青年海外協力隊からの呼びかけに応じて鍵盤ハーモニカを送ったことからマラウイのことを身近に知るきっかけとなった。現地の協力隊員からの手紙で自分の鍵盤ハーモニカは孤児がたくさんいる幼稚園に送られたことを知った。そして、あまりにもきれいな鍵盤ハーモニカに泣き出す子もいたということも知った。この活動を通じもっとたくさんの人が世界の現実を知り、身近に感じられるようになれば、子どもたちの笑顔が取り戻せると信じていると結んでいます。

「世界のみんなが幸せになるために、私が考えること、できること」というテーマに対して毎年さまざまなアプローチからの作品が出てくるが、今年も作品も若者らしいユニークな発想のものが多く、この生徒たちが将来どう成長していくかとても興味深い。多くは親の仕事の関係での海外体験で感じたことがベースになっており、「マウアが教えてくれたこと」のように、上の立場から考え援助活動を行うという、ボランティア活動にありがちな気持ちから、つい「かわいそうだね」とかけた声にたいして、かえって来た言葉からマウアの気持ちを知り、本当の援助とは何かを気づいたのも、マウアの現実とマウアとの交流の結果である。通りすがりの援助であれば、おそらくマウアも意見をいわず、本人も変わることはなかったでしょう。現地でのリアリティが生徒達に大きな力を与えていることは間違いないのです。

また、NPO や自治体の海外や国内での研修プログラムは大きな影響をあたえていることがわかる。「平和への希望」では、イスラエル、パレスチナ、日本、平和を作る子ども交流プロジェクトのように、その国に生まれてしまっただけの違いで子どもたちには戦争の責任はないが、いやおうなく巻き込まれ、被害者になる。そして、その体験での憎しみの連鎖が戦争を継続させる結果になる。その繰り返しをとめるために、NPO が当事国の子どもたちに交流を実践するのはとても良い企画だと思います。平和な生活を送っている日本の子どもたちにも、大きなインパクトがあることがこの文章から読み取れる。

また一方で、「私とマラウイを架けた橋」では、青年海外協力隊を通じての間接経験であるが、現地に溶け込んで生活している青年海外協力隊員からの情報はリアリティを持ち人を動かす力があることがわかります。

エッセイコンテストでは男子の作品は評価されないのか—増加する男女比の偏りを考える—

エッセイコンテストで解決しなくてはならない大きな課題は、応募の女子の比率が高く、その上男子の作品が入賞することが少ないことです。

今年の実験では女子 72%、男子 28%で昨年の女子 63.6%、男子 36.4%よりもさらに差が広がりました。その比は約 2.57 倍で昨年の約 1.75 倍を大きく越えました。審査員特別賞までの入賞者では女子 10 名に対し男子はたった 1 人でした。

この理由はなんなのでしょう。いくつか考えられるのは、現 JICA 理事長の緒方貞子さんのように、国連をベースに男女の別なく堂々と世界の最前線で活躍する女性をみて、国際協力にかかわる仕事を自分の将来の進路目標とする女性が増えてきたため、女子の実験が多いこと。高校生ぐらいの男子の文章は表現力において女子の情感を取り入れた文章の巧みに負けてしまうため、なかなか 1 次審査から抜けてこない。また「論文」的なカテゴリーでは男子も書きやすいが「エッセイ」というカテゴリーでは論理思考の男子が応募する場合テーマ選択に困るのではないかと。などが挙げられる。

しかし、このコンテストは男女を問わず中学、高校生に国際協力について考えてもらうためのコンテストであり、女子に偏るコンテストでは今の生徒たちが考えている本当の心を知るにいたらただけでなく広範な市民への国際協力への意識を養うためには望むところではないでしょう。

しかし、この課題を解決するヒントがありました。2004 年において男子の作品が 3 人も特選に出てきている年もありました。その内の 2 例を紹介しましょう。兵庫県播磨農業高校の宮永幸則君が書いた「現代の青木昆陽をめざして」という作品で見てみると自分が行ったサツマイモとヒヨコマメの混植栽培の研究から、ヒヨコマメの根に共生する根粒菌が土壌にたくさんの窒素分を残すため、混植したサツマイモの肥料なり、サツマイモの収量もあげることができる。これを利用して飢餓から人々を救えると考えたのでした。宮永君はいずれこの技術を持って青年協力隊に入り、現代の青木昆陽になりたいと夢見て努力していると結んでいます。

もう一例紹介すると、千葉県立君津青葉高校の伊井久人君が書いた「真っ赤な

大地を夢見て」という作品ですが、高校でバイテク部に属し植物の組織培養に関する研究を行うなかで、優良な形質を持つ植物を大量増殖させることで、アフリカなどの食料問題解決の糸口になると考えたのです。しかし、組織培養は無菌の環境下で行わないと成功しないため、実験設備にコストがかかり、開発途上国では使えないのです。そこで、考えたのが食品添加物を使うアイデアです。無菌ではないが食品添加物が雑菌の繁殖をおさえ、低コストでの組織培養が可能であることを確認したのです。伊井君は今後この方法での研究を積み重ね、技術を磨きアフリカの真っ赤な大地に乗りこんで生きたいと結んでいます。

この2例に共通するのは「エッセイ」というよりも「研究発表」に近い内容ですが、立派に特選として評価されています。

このコンテストが農業青年の海外移住奨励から始まった歴史をはじめにも書きましたが、その流れが、決してなくなったわけではない、むしろ JICA が移住から技術協力に変わろうとも、開発途上国を舞台にした技術支援をテーマにした論文的な作品も十分チャンスがあると考えてもらいたいのです。

教師として生徒への参加勸奨はどのようにしたら良いのか

募集は5月から始まり、作品提出期限は9月の夏休み明けです。募集の案内とポスターは5月に全国の高校に送付されます。まず最初にやることは学校に送付されたポスターを校内に掲示して、生徒たちに早めに声をかけていただけると良いでしょう。過去の作品集もありますので、それを読むのもヒントになるでしょう。作品集が手に入らなくても、一番簡単なのは、JICA（国際協力機構）のホームページの中のクラスルームというところに入賞作品が掲載されていますので、それを印刷するのが良いでしょう。

生徒がエッセイを書くきっかけを作るのは、国際協力に関心を持っている先生方の協力が必要です。ポスターを見て自主的に書き始める生徒はほんのわずかです。いい体験を持ちながら、それを表現することを気づいていない生徒たちを発掘するのも先生の役目です。

生徒から書く意欲を引き出すためには、授業や特別活動のなかで、国際協力に関わる単元で世界の今を考えさせる指導を行うといいでしょう。私は、いろいろなアプローチを考えますが、例えば教科情報の中で、情報の発信として、プレゼンテーションを作らせるのですが、そのテーマの一つに、世界の子供たちの現実を考えさせるため、ストリートチルドレンをテーマに設定します。図書館やインターネットで調べていくと、数千万人以上のストリートチルドレンが世界で生きていることに気づくのです。豊かな日本の現実からは考えられない現実をしり、それが国際協力への生徒の考え方に変化をあたえます。

また、海外途上国経験豊富な帰国、青年海外協力隊員やシニアボランティアの方を学校に呼んで話していただくのはとても効果があります。ビデオや写真を見るよりも現場で活動した人の言葉にはリアリティと迫力があります。現地の人たちの気持ちを知っていますので日本人的にみた考え方でなく、現地の考え方に即した考え方を聞くことができます。これはステレオタイプの考え方に陥らないために是非必要なことなのです。

といっても、どんな方を呼んだらよいかわからない場合でも、JICAでは「国際協力出前講座」を実施してくれます。講師料が払えない場合でも相談にのっていただけますので、地元のJICA国内機関に連絡してください。

エッセイ勸奨に活躍してくれた先生方にもっとステップアップしていただくために教師海外派遣研修があります

国際研では、教師海外派遣研修、青年海外協力隊、シニア海外ボランティアへの参加を勧めています。

なんといっても、教師自身が開発途上国の現実を知り、国際協力活動に参加すること。帰国後には、現地で養った問題解決能力をリアリティを持って授業に生かすことができるようになり、生徒達にとってもとても良いフィードバックができることとなります。

教師海外派遣研修は、JICAが進めるODAの啓発事業の一つとして12日間程度 全国から30名程度をアジア、アフリカ、中南米などの開発途上国の国際協力活動の現場に派遣して研修を行ってもらう制度です。12日間ですが、ツアーでは絶対にいけない開発協力活動中の奥地の村や、住民とのコミュニケーションがとれ、自分で行く旅行とはまったく違った素晴らしい経験を得ることができます。勿論、全国から30名の狭き門ですが、国際研ではエッセイ勸奨に特に努力してくれた先生や事務局活動に協力してくれた方を特に応援してJICAに推薦します。(募集は4月、5月)

青年海外協力隊は20歳から39歳まで、シニア海外ボランティアは40歳から69歳までの方が応募できます。基本的には2年間、(シニアボランティアでは1年間の派遣もあります)派遣された国の人々と共に生活し、地域住民と一体となって活動し、その国の経済的社会的発展に草の根レベルで寄与することが目的です。文部科学省では青年海外協力隊に関しては自由参加のシステムの他、学校の年度と同じ4月から出発する隊員に関して、各地の教育委員会を通じての参加システムもできました。2年間、開発途上国の現場で自分が今までに蓄積してきた技術を使い人のために尽くす活動への参加は、今まで養われた自分の知識、技術が本当に人のために役立つかの検証でもあります。また、日本人がほとんどいない現地で長期にわたる活動は自分の意思を鍛えなおす期間にもなります。途上国へのボランティア活動ではありますが、帰国後の教育活動への考えられないほど大きな力を得ることになるでしょう。(募集は春・秋2回 春は5月)